

オニバス 【学名：Euryale ferox】

オニバスはスイレン科オニバス属の一種で、池や沼に生育する一年生の水生植物です。全体に鋭い棘が密生しているのが特徴です。その風貌から、古くは清少納言の『枕草子』に「おそろしげなるもの」として取り上げられており、国内では本州、四国、九州で自生が確認されています。しかし、都市化に伴う開発などで自生する箇所は減少し、全国でも 60 箇所程度ともいわれ、環境省では 100 年後の絶滅確率は 99%とみえています。また、富山県氷見市の十二町潟オニバス発生地は、国指定の天然記念物となっています。

オニバスは、直径 1 cm ほどの黒褐色の種子が春ごろに成長を始め、夏には 5~8 枚の展開葉を持つようになり、その直径は 1~2m ほどに成長しますが、秋には一生を終えます。葉は、初期の 3 枚は沈水葉で針状から矢尻状へと変化し、4 枚目の葉から浮葉となり楕円形から円形の葉になります。葉の表面には著しい皺、裏面には鮮やかな赤紫色の葉脈があります。

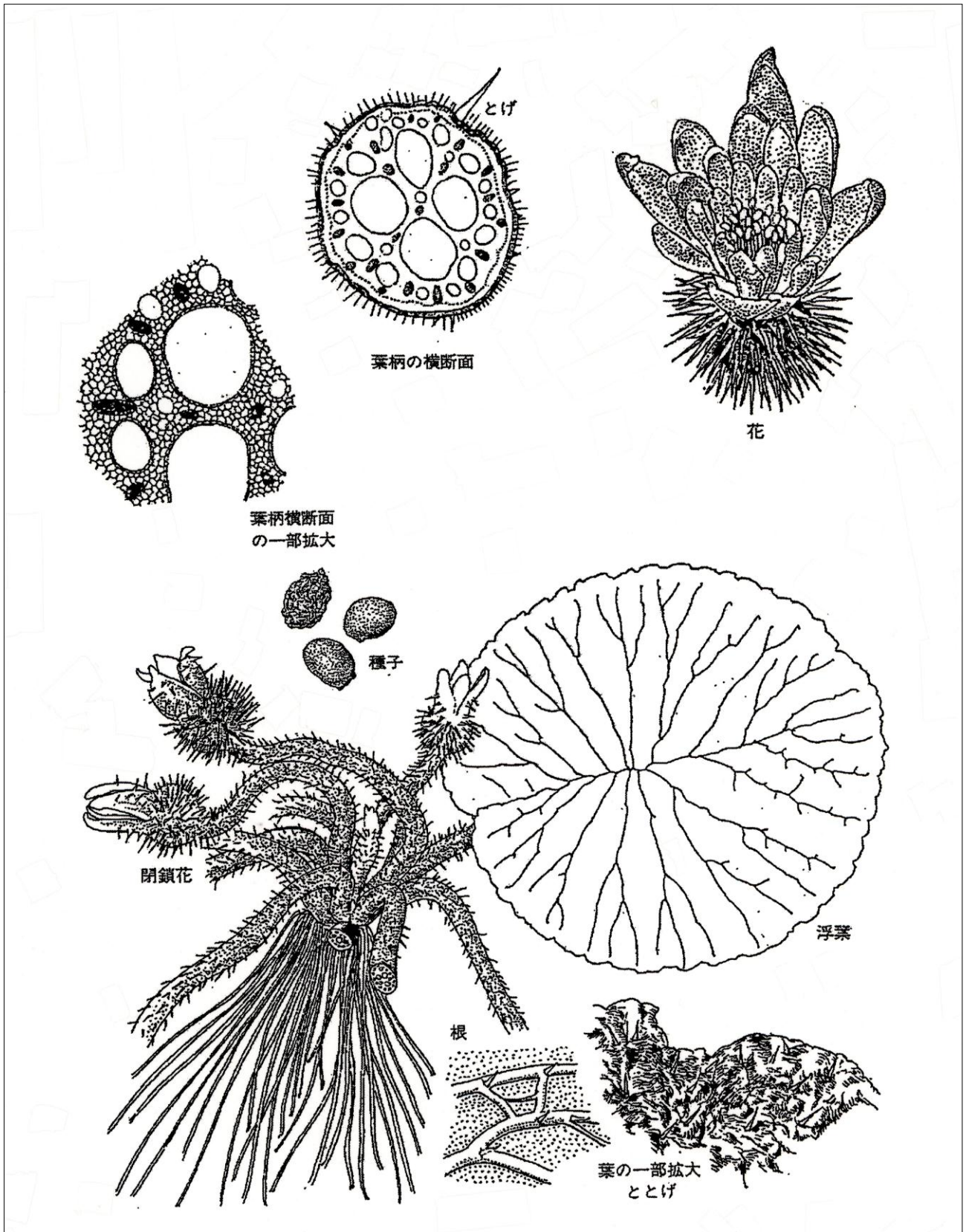
オニバスの花は、水中で自家受粉して結実する閉鎖花と水面に出て開花する開放花があり、閉鎖花は 6 月下旬から 9 月ごろまで、開放花は 8 月から 9 月の限られた期間の早朝だけに開花が見られます。果実は主に閉鎖花に結実し、100 個程度の種子を作ります。種子は仮種皮に包まれ、水面に浮遊した状態で移動します。仮種皮が腐ると水底に沈みますが、休眠状態で数十年の間生存するといわれ、また毎年同じ場所で発芽するとは限りません。

彦根城のオニバスは、築城当時、敵の侵入を防ぐため防御用に生育させたとも伝えています。ただ、彦根城に隣接する松原内湖の一隅にも戦前まで繁茂していたことが知られており、自生していた可能性も考えられます。現在、彦根城のオニバスは、尾末町の中堀と金亀公園管理事務所の裏手で生育が確認されます。

滋賀県内では、過去に長浜市や草津市などで自生していた記録がありますが、現在は、彦根城にしか生育が確認されず、県の絶滅危惧種となっています。ところが、オニバス生育地周辺では、通常のアスがオニバスの生育地を奪うように成長したり、種子を食する外来魚が侵入するなどの問題が発生しています。そのため、指定域である尾末町の中堀については文化財課が、また、指定域外の金亀公園管理事務所裏手については市民団体の「彦根城オニバスプロジェクト」が、それぞれオニバスの保護と育成に努めているところです。



写真提供：オニバスプロジェクト



東京都葛飾区水元都水産試験場資料より

彦根市教育委員会 文化財部 文化財課

TEL.0749-26-5833 FAX.0749-26-5899 e-mail:bunkazai@mx.hikone.ed.jp